



心臓神経症の弁証論治

黄 懷龍



当資料の転載、複製、改変等は禁止いたします。

一、概 論

(一) 定 義

心臓神経症とは、心臓に器質的病変は認められないのに、動悸や、胸の痛み、息切れ、頻脈、めまいなど循環器症状を訴える症候群である。その原因としては、ストレス、不眠、過労、心臓病に対する極度の不安などが考えられる。

中医学では「心悸」、「胸痺」、「鬱証」などの病症に含まれる。心臓を始め、肝臓や、脾臓、腎臓などの陰陽失調と関わっている。

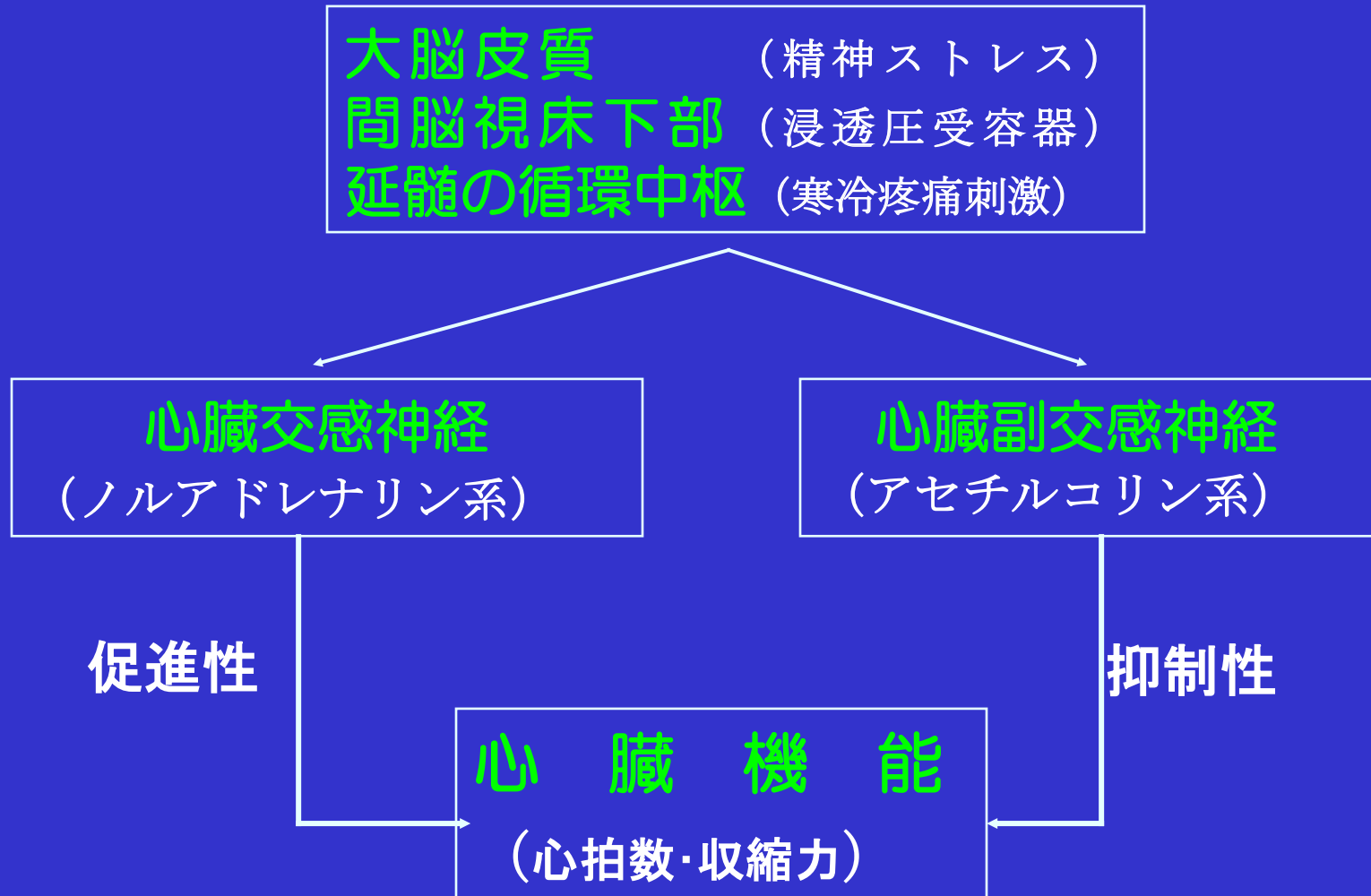
(二) 心臓の調節機構

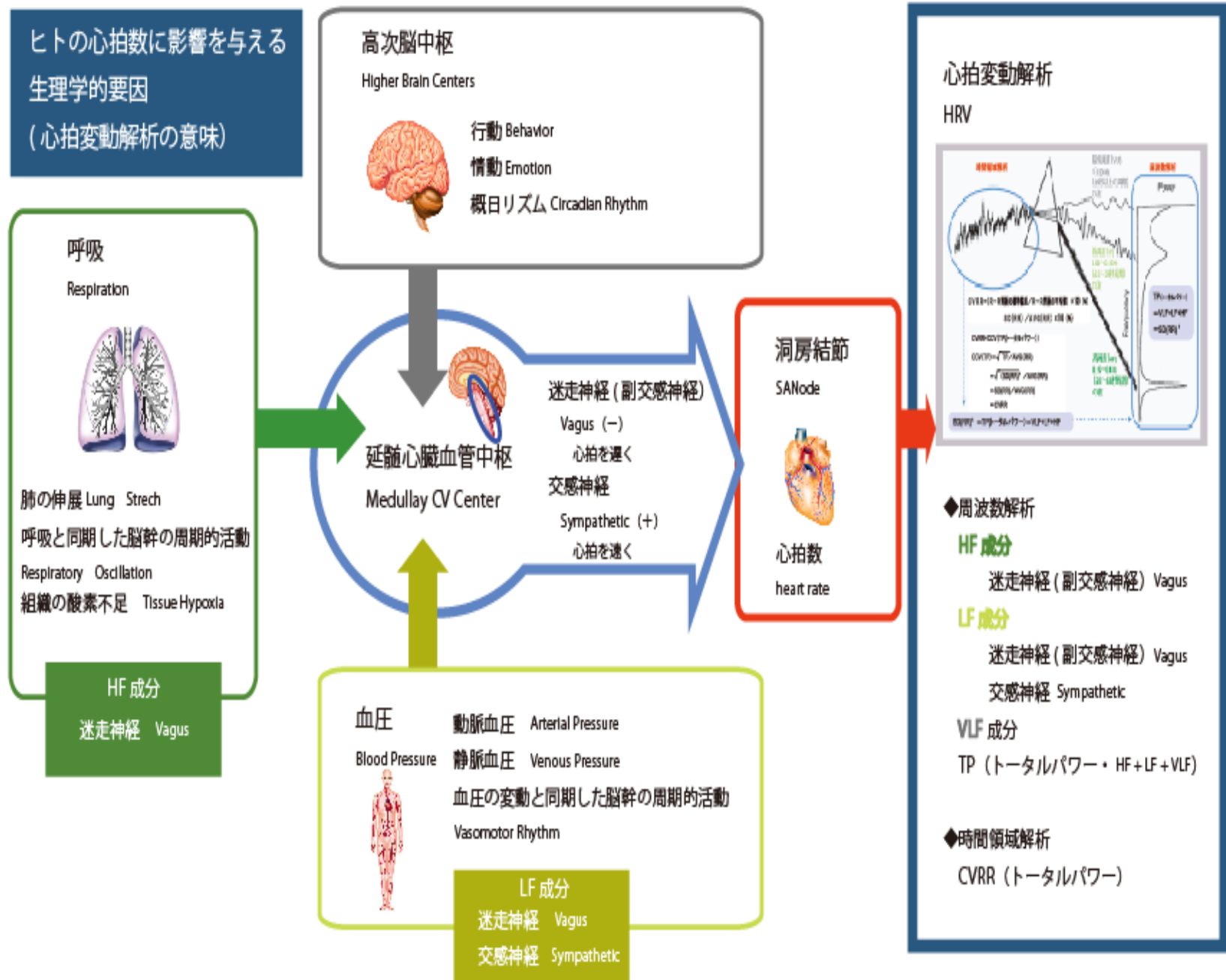
主に神経性調節（自律神経）

液性調節（ホルモンなど液体因子）

心臓の心拍数や収縮力は心臓の機能は促進性の心臓交感神経と抑制性の心臓副交感神経両方から自律的支配を受けているが、大脳皮質、間脳視床下部、延髄の循環中枢にも支配影響がされている。

心臓の調節機構





アセチルコリン
M2受容体

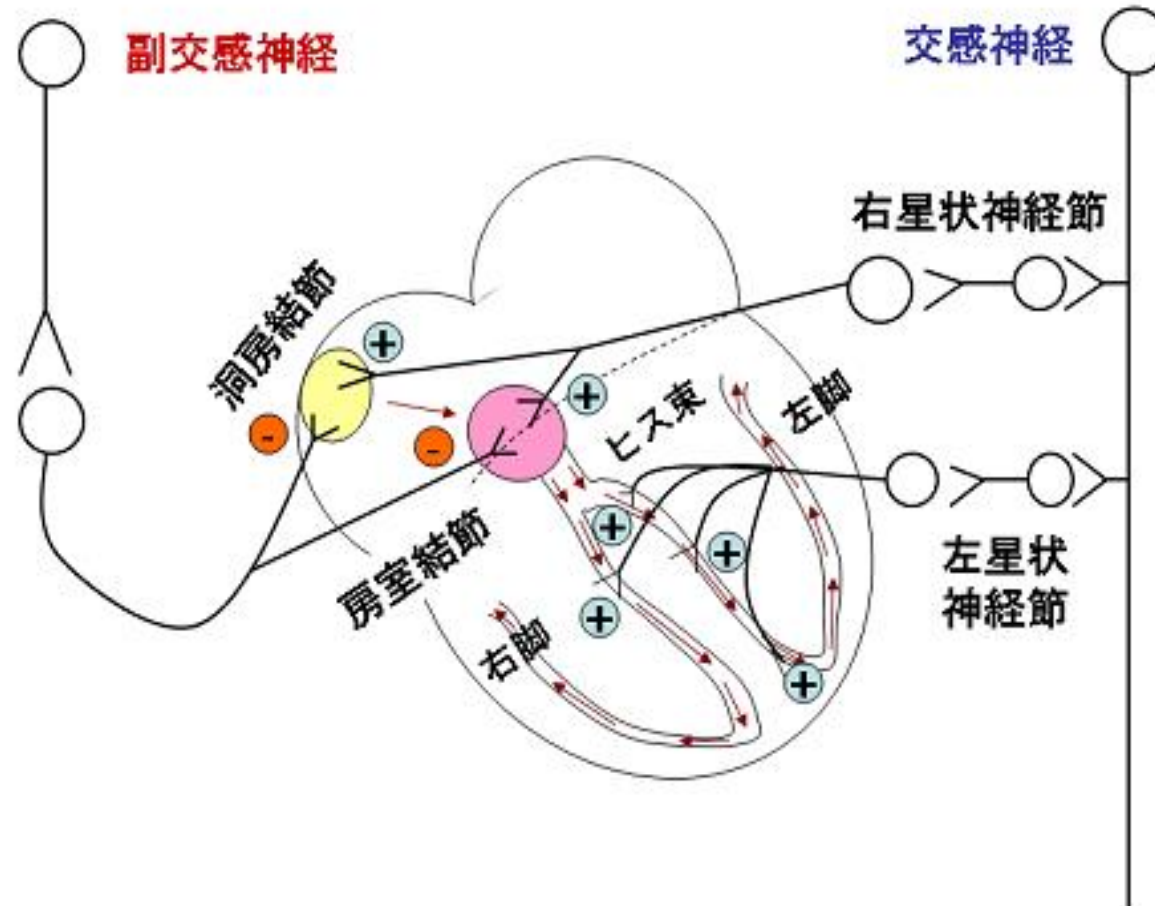
副交感神経

自律神経

交感神経

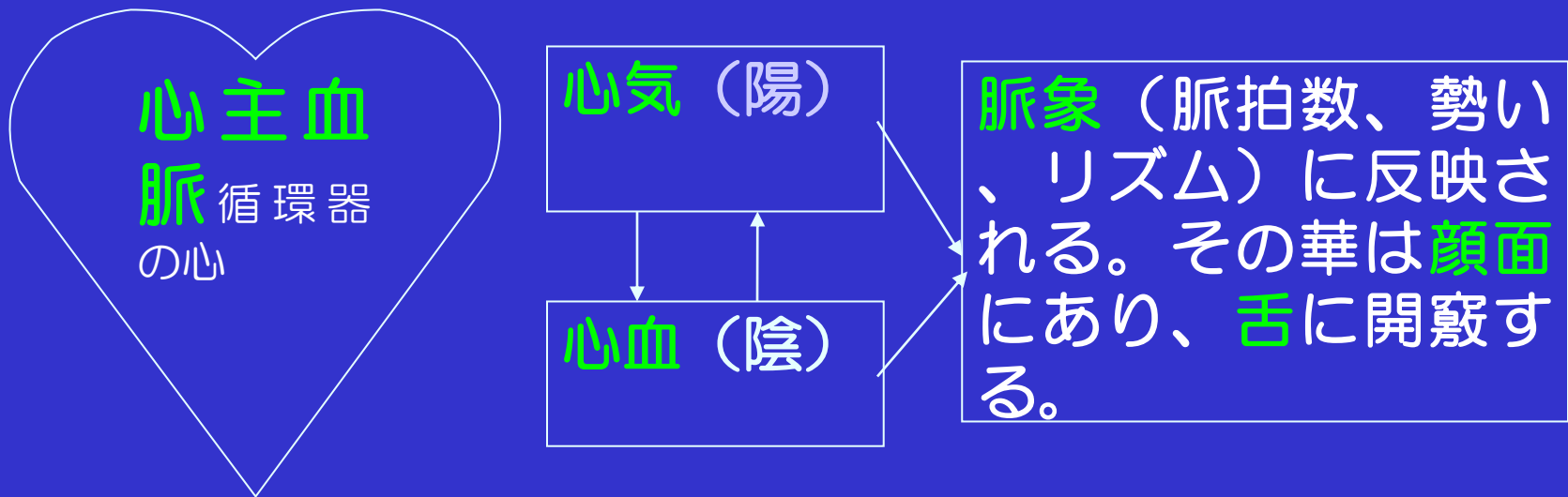
ノルアドレナリン
 $\beta 1$ アドレナリン受容体

心筋に対する神経の分布は交感神経に比べて乏しく



二、心肝の生理特徴

（一）心は血脈を主る



(二) 心は神を蔵す



広義の神：体の臓腑機能を総括する。人の生命活動の現れである。「心は五臓六腑の大主」である。

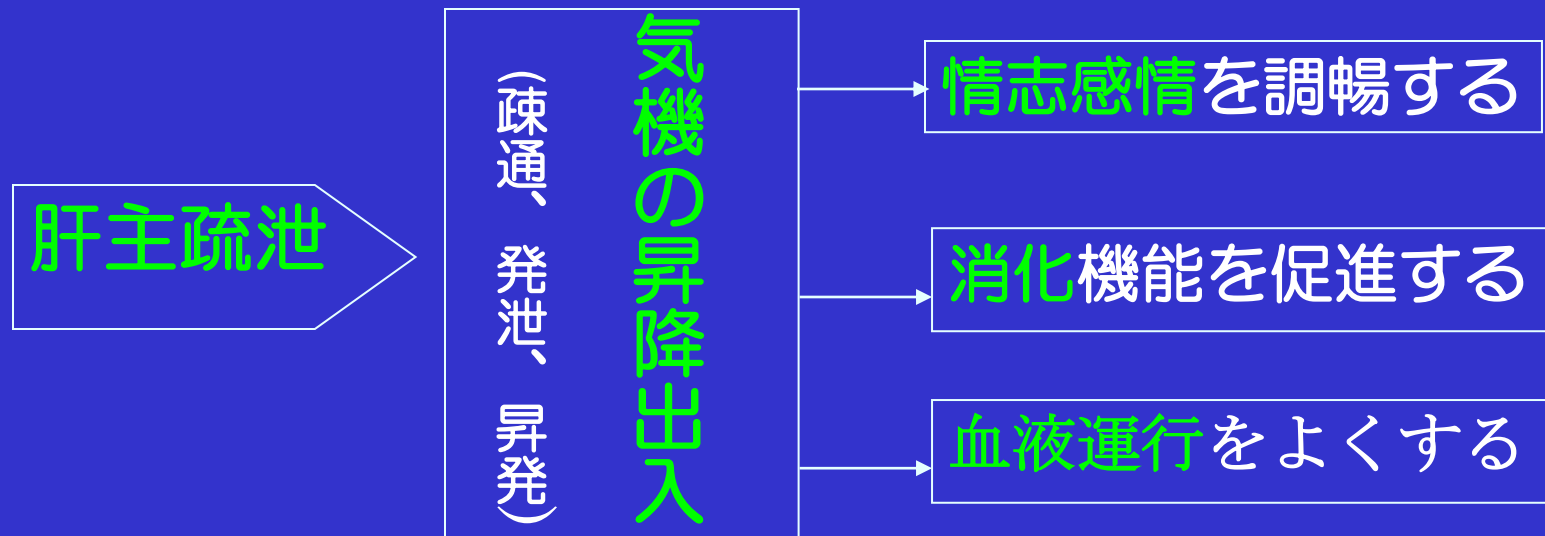
狭義の神：精神活動の総称で、大脳機能、中枢神経の機能とほぼ同じである。

正常生理状態では、心臓の陰陽が調和して、バランスがよく、心の主血脈と蔵神の機能が正常に働くためには、心血の栄養提供が不可欠である。心血虚すれば、動悸や、不整脈、胸痛、不眠、めまいなども影響します。

心機能低下の症状

機能	病 機	症 状
心主血 脈（心 は血脈 を主 る）	心気不足、心 血虚損	心悸、顔色に艶がない、 舌質淡、脈細無力）
	心血瘀阻、脈 道不暢	胸痛、顔色が暗い、唇と 舌質が紫色、脈細或は結 代
心蔵神 （心は神 を蔵す）	心神失調	不眠、動悸、意志傷害、 精神異常

(三) 肝は疏泄を主る



「肝は条達を好む、抑鬱を嫌う」。外界の精神刺激により肝の疏泄機能に異常が生じ、胸脇脹満、眩暈など気機阻滯の病変が現れる。又自律神経のバランスが消化機能と循環機能にも影響します。

三、病因病機

心臓神経症の原因としては、主に七情所傷、
労倦、臓腑陰陽失調により心不主血脈、心神失
養、肝陽肝火上擾、陽虚水飲上犯、胸陽不暢な
どがある。

(1) 心血不足

思慮過度や疲労により心脾が損傷され、営
血不足になり、心が栄養されなくなり、心の主
血脈、蔵神の機能が影響を受け、心悸、不眠、
眩暈などを引き起こす。

(2) 氣滯痰鬱

精神的ストレスによって、情志が暢やかさを失い、肝を傷め、肝が条達しなくなつて、気が疏泄できなくなり、肝気が鬱結する。肝鬱が脾に及び、脾が健運しなくなつて、湿が蘊積して痰が生じ、氣滯痰鬱となる。肝気が痰を伴って、上逆して胸部に結滯すると、イライラ、動悸胸悶、咽喉阻塞感、めまいなどが現れる。

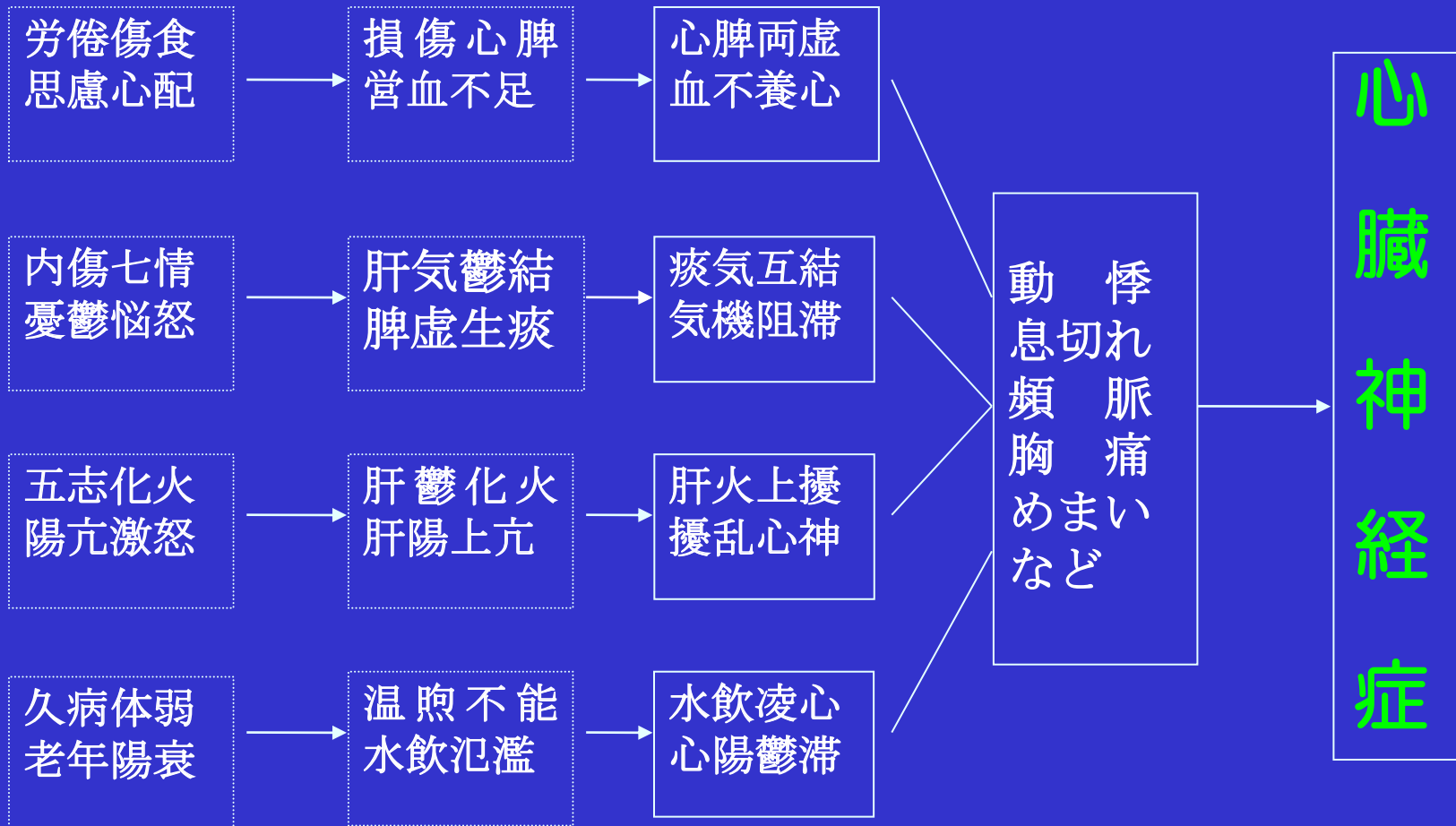
(3) 肝火擾心

怒りっぽいなど精神が亢奮したり、肝気鬱結が長引いて火と化したり（五志化火）、辛辣温補の食品を摂りすぎたりすることによって肝火が旺盛になり、肝火が上炎して心火を生じて、心肝火旺となり、火が動じて心を搔き乱だす。それで動悸、胸脇部灼熱痛、顔面紅潮、めまい、不眠多夢、口渇などの症状が現れる。

(4)陽虚痰飲

大病や長患いの後では、陽気が衰弱して心脈を温養できず、血脈を司れなくなり、心悸して息切れ、落ち着かない。脾腎の陽虚で気化ができず、水液が停滞凝集して飲となり、飲邪が上部を犯し（水飲凌心）、心陽が抑えられて、心悸、胸痛、めまいなどが起こる。

心臓神経症の病因病機



四、弁証論治

心臓神経症は動悸、胸痛、息切れ、呼吸困難、めまいなど循環器の症状を示しますが、よく不安、緊張、焦燥、神経過敏、不眠、抑うつなどの精神症状を伴う。

診断弁証に際して、先ず心臓の器質性病変を除外しなければならない（心電図、負荷心電図、ホルター、心エコー、血液検査など）

。

(一) 類証鑑別

	驚 悸 (機能性)	怔 忡 (器質性)
誘 因	外部刺激（恐れや怒りなど）、ストレス、過労など。驚いたため動悸するものである。	外因はないが常に動悸し、胸悶不快感があり、発作が起きるとドキドキして止まらず。
症 状 特 徴	多くは発作性、急激に、発症が速い。全身状態はよく、一過性であり、病も浅い、実証が多い	持続性の激しい動悸。少し動くと発作が起きる。全身状態は悪く、進行性であり、病が深くて重く、虚証が多い。
予 後	予後良好、自ら緩解し、普段は健常者と変わらない	心臓病疾患によって異なる。

狭心症との鑑別

	心臓神経症 (機能性)	狭心症 (器質性)	
痛む症状	昼間に起こることが多い、ズキズキとかチクチクと表現されるような痛みで、たいていは一人で静かにしている時に現れる。	運動中或は就寝中なら明け方に起こることが多い。胸骨部あたりに“押しつぶされる”ような胸痛、圧迫感、絞扼（こうやく）感、息切れなどがある。	
痛む部位	左胸のごく狭い範囲に限られる、左胸の一か所を指し「心臓が痛い」という場合が多いのです。	胸骨下、左前胸部から左上肢や、左上顎への放散痛、手掌大以上広範囲が締め付けられるように痛み。胸痛の部位をはっきり指し示せないことが多い。	
痛みの持続時間	数秒間と短かった、反対に長い時は1日中続くこともある。	痛みの持続時間は5分から10分くらい程度である。	
検査	異常なし	異常あり	

(二)証 治

1、心気血虚

○ [症状] 心悸してビクビクし、頭がクラクラして元気がなく、顔色に艶がない、全身倦怠感、食欲不振、不眠多夢、健忘。舌質は淡く、細弱脈。

[治法] 補血養心、益気安神

[方剂] 帰脾湯加減

[加 減]

のぼせ、イライラ、不眠、不安を伴う動悸、
胸脇部脹満感なら加味帰脾湯に替える。

気血両虚、呼吸少気、動くと息切れ、心虚驚
悸には人参養栄湯を加えて益気補血、心を養い
精神を安定させ、心悸を治める。

全身倦怠感、食欲不振、元気のない方にコウ
ジン末を加え、補気生血強心する。

心が動悸して結代脈があれば、炙甘草湯で血
を養い、陰を滋養して脈を回復させる。

熱病の後期で、損傷が心陰に及んで心悸する
ものは生脈散を使い、気に益し陰を養う。

2、肝火擾心

〔症状〕 動悸して落ち着かず、イライラして心中に不快な熱感があって寝つけない。胸脇苦満、煩驚、頭がクラクラして眩暈、口渇。舌質が赤く、舌苔は黄色い或は少ない、脈は弦数。

〔治法〕 清熱解鬱、鎮心安神

〔方劑〕 柴胡加竜骨牡蛎湯加減

[加 減]

イライラして怒りっぽく、胸中に不快感があって脇が脹り、寝汗など神経症的な要素が強い場合は、それに加味逍遙散を合方する。

冷え症や胃腸虚弱或は自汗、寝汗、或は頭痛があれば、桂枝加竜骨牡蛎湯に変える。

胸痛、熱がり、煩躁イライラ、頬紅潮口乾、不眠など、或は月経困難症など者にはサフランを加える。

陰虚火旺で、五心煩熱(手足の裏、心臓の五ヶ所が熱っぽい)や耳鳴難聴、腰がだるいなどの症状が伴えば、六味地黄丸を加える。

便秘があれば大黃甘草湯を加える。

3、氣滯痰鬱

[症状] 神経質があり、胸が塞がれたような不快感、時に胸痛、動悸、めまい、脇痛があり、気分が塞いで、咽喉、食道部に異物感があり、舌苔は白膩、弦滑脈。心臓病なのではないかと不安感が出現して胸悶動悸が増悪したが、他の事に集中するといつの間にか忘れている。

[治法] 化痰利気、疎肝解鬱

[方剤] 半夏厚朴湯加減

[加 減]

不安、怒りっぽい、めまい、引き攣り、焦躁が強い時には**抑肝散**を加える。

更年期の動悸、胸の痛み、イライラ、胸脇熱感などは**加味逍遙散**を処方する。

体がだるい、めまい、心血不足で眠れない時には、**酸棗仁湯**を加える。

全身倦怠感、食欲不振、元気がない方には**コウジン末**を加え、補気強心する。

胸の痛みが取れない、不眠、顔が紅潮口乾、或は瘀血、月経困難症者には**サフラン**を加える。

痰熱が体内を掻き乱し、胃が和降しなくて心神が不安には**黄連温胆湯**で痰熱を清める。

4、水飲凌心

[症状] 動悸して眩暈し、息切れ、心窩部がつかえる。寒がり（形寒）、四肢が冷え、尿量が少ない、下肢に浮腫が現れ、喉が渇いても飲みたがらず、悪心して涎を吐く、舌苔は白滑、弦滑脈。

[治法] 振奮心陽、化氣行水

[方劑] 苓桂朮甘湯加減

[加 減]

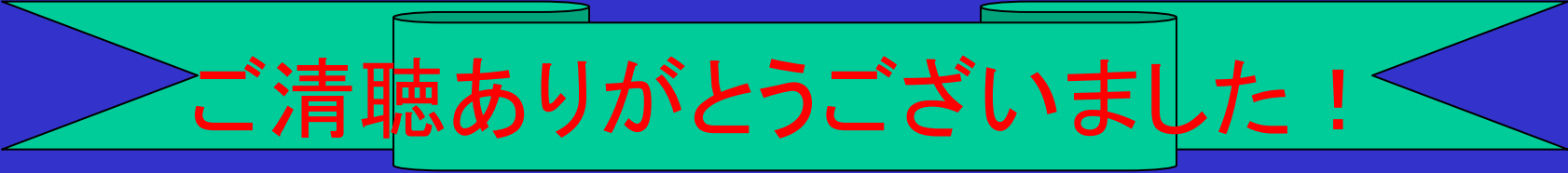
心悸がひどく、不眠、多汗などの時には桂枝加竜骨牡蛎湯が適応する。

寒がり胸痛四肢冷えなら、桂枝加苓朮附湯に変えて温通胸陽、化飲止痛する。

腎陽の虚衰により水が制御できず、心悸して喘咳し、浮腫がひどければ、真武湯を加減し、温陽行水する。

気虚倦怠感心悸息切れは動くとひどくなるはなら、コウジン末を加えて、温補心気、強心する。

胸部冷痛、顔面蒼白、四肢冷えがひどければ、更に加エブシ末を加え、温陽益気する。



ご清聴ありがとうございました！